

## トランス・ランゲージングスペースがバイリンガル高校生のリーディングに与える影響 —日中バイリンガル高校生の学習方略に着目して—

権野 禎 (お茶の水女子大学大学院 院生)

### 1.問題提起・研究目的

日本語の読解力はバイリンガル高校生が、学校の教科学習や日本で生活する上で必要不可欠な能力である。しかし地域の支援教室で日本語の読解力の養成は積極的に行われていない。また支援教室では日本語のみで学習活動を進めることが多い。その理由として、支援教室では支援者と学習者との間に母語の共有はなく、共通の言語リソースが限定的であること、そして読解力養成のための教授法かつ読解方略が確立されていないことが挙げられる。このような問題の解決方法を探るために本研究では読解方略に着目し、中日バイリンガル高校生を対象者とし、トランス・ランゲージング・スペース(Wei, 2011)という考え方に基づいた空間を提供した。その空間での約3ヶ月間の協働読解活動が対象者の日本語の読解力と読解方略に与える影響を検討することで、バイリンガル高校生の読解教育への示唆を得ることを目指した。

### 2.先行研究

トランス・ランゲージングとは単なる母語使用を意味するのではなく、バイリンガルが自らの全ての言語リソースをその場や状況に合わせて自由に使って、知識の獲得や理解を深める読み書き等の思考を伴う言語活動である(Garcia,2009)。海外ではバイリンガルの思考や認知を包含した言語活動であるトランス・ランゲージングは、バイリンガルの教授法や学習法に活用されている(Celic & Seltzer, 2012 他)。さらにトランス・ランゲージングを使用し社会言語的活動を行う空間として、トランス・ランゲージングスペースが Wei (2011)によって提唱された。しかしトランス・ランゲージング・スペースがバイリンガル高校生に日本語の読解力と読解方略に与える影響に関する研究は管見の限りない。

### 3.学習活動・研究方法

本研究では Wei(2011)のトランス・ランゲージング・スペースの考え方を援用し、バイリンガル高校生がトランス・ランゲージングを使用して協働読解活動を行うこととした。

本研究は来日歴3年以内の中日バイリンガル高校1年生3人を対象とし、約3ヶ月間、1回につき1時間程度の協働読解活動を10回行なった。活動内容は、中上級者程度の日本語読解説明文を用いて、トランス・ランゲージングの使用による、清川・犬塚(2003)の「相互説明」を行ってもらった。

対象者は協働読解活動終了後、活動中のトランス・ランゲージングの使用等について質問紙に記入し、その記入事項を踏まえて1人10分以内でインタビューを受けた。このインタビューの録音を文字化した後、データとしてコード化した。インタビューデータは学習活動におけるバイリンガルのトランス・ランゲージングの使用目的及び機能(Garcia & Kano, 2014; 加納, 2016; Yukawa, 2016)を参照し、質的分析を行なった。

対象者は課題文を読み、課題文に付属の「内容把握」と論理的「主張の導出」に関する設問に

回答した。回答はワークシートに記入後、データとして提出した。読解活動データは対象者毎に回答正誤表を作成した。

インタビューデータの分析と読解活動データの分析を総合し、トランス・ランゲージング・スペースがバイリンガル高校生の読解力と読解方略にどのような影響を与えるか、について考察を行なった。

#### 4.分析結果

インタビューデータによる「読解方略」に関する分析では、3人の対象者はトランス・ランゲージングを協働読解活動の初期では言語力不足を補うための「言語能力拡大」(加納, 2016)として使用し、中間期では与えられた課題を遂行する過程で「言語リソースの充実」(加納, 2016)として活用したと見られる。やがて協働読解活動の後期で3人の対象者は与えられた課題目標に到達するための「思考の促進」(加納, 2016)としてトランス・ランゲージングを行なっていたと考えられる。このことから対象者はトランス・ランゲージングを読解方略として活用していたと推察できる。

読解データによる「読解力」に関する分析では、3人の対象者は協働読解活動の初期において「内容把握」の設問でも「主張の導出」の設問でも正解が導き出せなかった。協働読解活動中間期以降、3人の対象者は「内容把握」「主張の導出」の両設問で正解が導き出せるようになった。このことから対象者が課題文の内容を把握し、そして客観的な事実・証拠と主観的な筆者の主張を区別した上で、主張を導出できるようになったと考えられる。

#### 5.考察

以上の分析結果から、3人の対象者は読解方略としてトランス・ランゲージングを使用する際に言語能力の拡大を目的としていた段階では、協働読解活動における課題の読み取り及び設問への回答には困難を抱えていた。しかし言語リソースの充実及び思考の促進としてトランス・ランゲージングを使用することにより、日本語の課題文の内容が把握でき、文中から筆者の主張が見出せるようになった。また、協働読解活動が回を重ねる度に、トランス・ランゲージングの使用及び機能が多様化した。つまりトランス・ランゲージングを読解方略として活用することが、中日バイリンガル高校生の日本語の読解力に影響を与えたと考えられる。

#### <主な参考文献>

- Celic, C. & Seltzer, K. (2012) *Translanguaging: A CUNY-NYSIEB Guide for Educator*. New York: CUNY-NYSIEB.
- García, O. (2009). *Bilingual education in the 21st century: A global perspective*. Malden, MA and Oxford: Blackwell/Wiley.
- García, O. & Kano, N. (2014) *Translanguaging as process and pedagogy: Developing the English writing of Japanese students in the US*. In Conteh, Jean and Meier, Gabriella (eds)(2013) *The multilingual turn in languages education: benefits for individuals and societies*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Wei, L. (2011). Moment analyses and translanguaging space: Discursive construction of identities by multilingual Chinese youth in Britain. *Journal of Pragmatics*. 43(5). 1222-1235.